

同窓生の近況



瀧本 英二

九州大学システム情報科学研究院
平成3年情報工学専攻博士了

博士課程を修了後、同じ研究室の助手に採用されてから17年間（学生時代を含めると四半世紀にわたり）「電気系」の一員として過ごしてきました。その間、第37号の同窓会便りの編集にも携わりましたが、確か、この頃から紙面を刷新し全頁カラー印刷になったと思います。当時の編集後記にも書いたことですが、読者層と発行部数から推量される同窓会便りの潜在的な影響力の大きさに思いを馳せると、近況を書くにも身が打ち震えるような感覚を覚えます。

さて、私は、平成20年4月に九州大学システム情報科学研究院の教授に採用され、現在に至っております。早いもので、九州に移って10年目になりました。とはいえ、学生時代から相も変わらず、機械学習理論、計算理論、アルゴリズム理論の分野で、紙と鉛筆でゴリゴリ数式を連ねるような研究を愚直に続けております。

学部教育は、主に、理学部物理学科の情報理学コースを担当しております。情報系の学位プログラムが物理学科内に設置されていることもユニークですが、定

員が1学年12名ということで、非常に中身の濃い少人数教育が実現できていると思います。一方、工学部電気情報工学科にも計算機工学課程（約60名）がありますが、こちらは典型的な情報コースという感じです。私を含め、情報理学コースを担当する教員は、電気情報工学科の学生も卒研生として受け入れることができます。この、異なる土壌を持つ学生の行動様式の違いは非常に興味深いものです。あくまで私見ですが、その違いは次のようにまとめられるように思います。

情報理学コース：リベラル、平等主義的、
原理主義的

電気情報工学科：保守的、封建的、実践的
例えば、情報理学コースの学生は、教授の肩書を持つからといって無条件に敬うことはしません。教員も学生も対等な人間であることから出発します。このような態度は、私にとっては心地よいものです。また、情報系でありながらプログラミング技術に重きを置く学生は少数派です。理学と工学のフィロソフィの違いが垣間見えます。

あの震災後、帰省するたびに仙台が着実に復興しつつあることを感じます。ですが、洗練された商業施設が建ち並ぶと同時に、老舗の店や行きつけの店がだんだんなくなり、一抹の寂しさも感じます。もっとも、こうして人は年を取るのだなあと思う今日この頃です。



百足 勇人

富士通(株)
平成27年情報科学研究科システム情報科学専攻修士了

私は平成27年に情報科学研究科システム情報科学専攻の修士課程を修了し、富士通株式会社へ入社して3年目です。

在学中は、電気通信研究所の大堀研究室に所属し、関数型言語やコンパイラ、プログラミング等に関する研究に取り組んでいました。研究室で、先生方にご指導頂き培ったプログラミングと論文作成の技術は、富士通へ入社してからも様々な場面で活かすことができ、感謝しております。研究以外にも、通研の夜桜でお花見会をしたり、他研究室と合同チームで電気系駅伝大会に出場したりして、仲を深め合いながら過ごした日々はとても良い思い出です。

富士通入社後は、静岡県沼津市の事業所に配属され、当社のスーパーコンピュータ「京」をはじめとする

HPC関連製品の、コンパイラやライブラリといった開発言語ソフトウェアの検証業務に従事しています。世界のスパコンを目指す国の威信をかけた事業の一端に関わっていることを、非常に誇りに思っています。ソフトウェアの検証により、お客様に高品質の製品を迅速に提供するため、私たちのチームではソフトウェアテストの革新を進めており、特にテストプログラム自動生成技術に力を入れています。この技術は、2017年9月に、日本科学技術連盟主催のソフトウェア品質シンポジウム2017 (SQiP2017) で発表した際に賞も頂いており、社外の方からも一目置かれる技術となっています。

コンパイラの品質検証やシンポジウムへの論文投稿および発表にあたり、大学で学んだコンパイラの構造原理や論文作成の技術を、直接的に、かつ大きく活かすことができ、感謝しております。大堀先生、上野先生をはじめ、大学でご指導いただきました皆様方に改めて深く感謝申し上げます。

最後になりますが、同窓会の皆様方の益々のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。



縫村 修次

三菱電機 (株)

平成14年電子工学専攻 修士了

卒業生の皆様におかれましては各方面にてご活躍のことと思います。私は2002年3月に電子工学専攻の修士課程

を修了後、三菱電機株式会社に入社し、配属先の通信機製作所(兵庫県伊丹市)にて衛星通信をはじめ、各種レーダ、追跡管制や天文観測用の大型望遠鏡等に用いられるアンテナ機器設備の開発設計に従事しております。

在学中は電気通信研究所の水野皓司先生のもとでミリ波帯の近接場顕微鏡の研究に取り組み、顕微鏡システムの測定系改善や材料定数評価を目的として解析、治具製作、実験まで研究開発の一連の流れについて学びました。水野先生をはじめ諸先生方、諸先輩方にご指導いただきながら培った知識や経験を基礎として、入社時から自信を持って業務に取り組みましたが、現在曲がりなりにも一人前の技術者として従事できている所以だと思います。卒業以来、仙台を訪れる機会が無いのが非常に残念ですが、最近よく当時の出来事が思い出されとても懐かしく感じるが多くなりました。(前厄を迎えました。歳のせいでしょうか。)現在は青葉山まで地下鉄が通って非常に利便性が良くなったと聞いていますし、杜の都・仙台はきっとさらに魅力的な街になっていることでしょう。いつか家族を連れて

訪れることを楽しみにしています。

さて三菱電機では、入社当時からほぼ一貫してアンテナ設計に従事しています。一口にアンテナと言っても、パラボラアンテナに代表されるような反射鏡形式や平面/線状アンテナもあれば、その大きさは数mmから数十mの規模まで幅広く、多種多様で一つとして同じものはありません。技術者としては楽しい反面、会社の事業活動上はQCD (Quality・Cost・Delivery) を強く意識して業務を進める必要があるため、プロジェクト毎に生じる課題に対してどう解決していくか頭を悩める日々です。そういった状況の中で特に知識・経験の浅い若手時代はとにかく苦勞を厭わず、関係部門の方々と積極的にコミュニケーションをとることで周囲との信頼関係を築き、業務が円滑に運ぶよう腐心しました。この時の信頼関係は今も大切な資産となっています。中堅となった現在は若手の教育、円滑な開発推進の旗振り、新規事業の創造・開拓、過去の技術遺産の継承など、会社の事業継続・拡大に向けて、受け身ではなく自らが発信・働きかける立場で物事を見る必要が出てきました。多岐に渡り一見途方もないような気がしますが、大切なことは「あるべき姿」を具体的に示せるかだと思っています。「言うは易く行うは難し」と言いますが、入社当時と同じく苦勞を厭わずチャレンジし自分の可能性を拓いていきたいと思っています。

最後になりましたが、在学中お世話になった先生方、卒業生の皆様の益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

未来戦略懇談会

“電気・情報未来戦略 – 21世紀を拓く情報エレクトロニクス –”懇談会 (略称：未来戦略懇談会) の活動報告

未来戦略懇談会運営委員長 松浦 祐司

電気・情報系『未来戦略懇談会』では、同窓会の皆様をはじめとする会員企業の協力のもと、学生の人材育成に重きを置き、様々な取り組みを行っています。

2008年10月の発足から9年となり、順調に活動を続けております。会員企業も、本年度は自動車関係を中心に新たな参加があり、昨年度よりさらに増えて約80社となりました(2017年11月15日現在)。

未来戦略懇談会では、「研究開発実践論」と「企業フォーラム」を活動の2つの柱としています。「研究開発実践論」は企業における研究開発の実際や大学における研究との違い等について学生が理解を深めることを目的とした、電気・情報系の修士課程の学生を対象



研究開発実践論の講義風景